のこりの目玉　　イスラエル

昔むかし、あるところに、貧しい男がいました。家にはひとかけらのパンもなく、子どもたちはお腹をすかせていました。

男は、悪魔たちのところに行ってみようと思いました。

岩穴まで行って、悪魔を呼ぶと、いっぴき出て来て、

「何か用か」とききました。男は、

「生きるのがいやになったんだ。パンはないし、子どもたちは腹がへって死にそうだ。どうすればよいか教えてくれ」といいました。

「そんなら、子どもをひとりわしに売れ。同じ重さの金貨をはらってやる」

「承知した」

悪魔は、男に金貨をわたし、

「あした、その子どもをこの岩山によこせ。よこさんときには、こっちから取りに行く」といいました。

「承知した」と、男は、いって家に帰りました。

つぎの日、男は息子のひとりに、いいました。

「おまえ、あそこの岩山に行ってこい。おじさんが出て来て何かくれるからな。一時間か二時間したらもどってこい」

「わかったよ」

男の子は、遊び仲間に、

「みんな、おいでよ、岩山へ遊びに行こう」といって、みんなで岩山に行きました。

悪魔は、岩穴の戸を細目にあけて、外をのぞいていました。そこへ、子どもたちがやって来ました。男の子は、岩の間に黒いものがあるのを見つけて、

「だれか、あの黒いものを射られるか」といいました。そして、すぐに自分で矢を放ちました。矢はみごとに悪魔の目玉に当たりました。

「痛て、て、て！」

悪魔は穴のおくに逃げこんで、それっきり出て来ませんでした。

日が暮れてもだれも来ないので、男の子は家に帰りました。男はびっくりして、

「どうしたんだ。なぜ帰ってきた」とききました。男の子は、

「だって、だれも来なかったんだもの。暗くなってきたから帰って来たんだ」といいました。

あくる日、男は岩穴に出かけて行って、さけびました。

「どうして、子どもを連れに来ないんだあ」

すると悪魔が、おびえきって答えました。

「いらんいらん。のこりの目玉までぶちぬかれちゃ、たまったもんじゃない！」

村上郁再話

資料『世界の民話１８』小川超訳／ぎょうせい